

# 身体をめぐる権力のジェンダー差

— 福島大学行政社会学部学生に対するアンケート調査から —

高橋 準

## 1 はじめに

「意志が弱いなーと思うと同時に、こんな体なんてみためが変わんなきゃ、いいやと。女じゃないっすね。」

ある18歳の女性は、こんなふうに自分の「ダイエット」失敗についての心境を語ってくれた<sup>1</sup>。

別の19歳の女性は、「ダイエット」をしない自分についてこう述べている。「学生の今なら外見を気にしなくても『許される』と思っていますが、この先、社会に出てから女らしいことをしたくない自分が、否応なく、変わらされるかもしれないと思うと、とても恐ろしい。」<sup>2</sup>

こうした若い女性たちの声を聞いていると、彼女たちの多くにとって、「女であること」と「やせること」あるいは「やせようとする」と「やせようとする」と「やせようとする」が分かちがたく結びついていることがしばしば示される。それは社会からの要請であるとともに、主体の側に深く内面化されているものでもある。もちろん、健康上の理由で体重を減らす必要があったり、逆に増やす必要があったりする場合もある。あるいは、「やせたい」と思っているにもかかわらず「しない」「できない」場合もあるだろう。しかし、そういった個人的事情の相違を超えて、体重を気にすることは「女であること」の一要素であるという共通の理解が存在するのではないだろうか。

本稿では、ここ数年にわたって大学の講義の中で実施している「ダイエット」など自分の身体の変更に関する調査結果をもとに、主に若い女性および男性が

自分の身体に対してどのような感覚を持ち、どのような実践を行なっているのかということと、そのジェンダー差を明らかにすることを通して、現代日本社会における身体をめぐる権力の一側面を分析する。

もとになっている調査は、福島大学行政社会学部屋間主コースの専門講義科目「現代文化論」の中で実施しているアンケートである<sup>3)</sup>。このアンケートでは、「ダイエット」（アンケートおよび講義中では「瘦身」を意味する一般的な用法に基づいてこの語を用いている）を中心とする自己の身体の改変にかかわる実践経験を問うている。以下に内容を示す。

### ダイエットやエステなどについて

性別 \_\_\_\_\_ 年齢 \_\_\_\_\_

Q 1（全員にお訊きします）あなたは今までに「ダイエット」をしたことがありますか。  
当てはまる番号に○をつけてください。

- 1 はい                                  2 いいえ

（上で「1」とお答えになった方は以下のSQ 1～3にもご回答ください。）

SQ 1 どんな内容のものですか。具体的にお書きください。

SQ 2 その「ダイエット」についての情報は主にどのように入手しましたか。1つだけ選んで○をつけてください。

- 1 雑誌・書籍から                      2 TV・ラジオから  
3 友人・知人から                      4 その他（ \_\_\_\_\_ ）

SQ 3 「ダイエット」の結果についてどのような気持ちになりましたか。

Q 2（以下全員にお訊きします）あなたの実際の身長と「理想の体重」を教えてください。  
身長 \_\_\_\_\_ cm                  |                  理想体重 \_\_\_\_\_ kg

Q 3 「ダイエット」以外に自分のからだに手を加えたことがありますか。以下の中から  
当てはまるものをいくつか選んで数字に○をつけてください。

（該当者はSQにもご回答ください。）

- 1 エステティック                  SQ 具体的内容は？（ \_\_\_\_\_ ）  
2 美容整形                          SQ 部位は？（ \_\_\_\_\_ ）  
3 筋力トレーニング・ボディビル

SQ スポーツトレーニングの一環としてですか？

- 1 はい                  2 いいえ

- 4 その他（ \_\_\_\_\_ ）

この調査は研究目的で行なっているものではなく、次の週までに集計して講義の中で議論の素材として使うためのものなので、構成は見たとおり単純なものである<sup>4</sup>。

この調査は2000年度から2003年度にかけて「現代文化論」の講義中にその回の受講者を対象にほぼ同一の内容で実施している（講義中に質問紙を配布し、記入させて回収）。この科目は学部共通基礎科目の一つであり、主に初年度生が受講しているが、編入・学士入学者（3年次生）も一部受講している。したがって、回答者の年齢は18～20歳が中心であるが、一部それを超える年齢の者も含まれている。回収率はほぼ100パーセントであるが、ごくわずかに白紙回答や一部が異常値になっているものなどもあり、それらは集計から外している。なお、Q2だけは2001年度以降に新たに付け加えた質問である。

今回はQ1およびQ2の「ダイエット」にかかわる回答に限って考察の対象としたい。

## 2 「ダイエット」する身体——きびしい女性の「体重規範」

まずアンケートのQ1から、どのぐらい学生たちが「ダイエット」を経験してきているのかと、その内容について、簡単に見ておこう。次に各年度ごとに「ダイエット」経験の有無および割合を性別ごとに示す（表1）。表中の数値は実数で、カッコ内は割合（百分率、小数点第2位で四捨五入）である。

このように、年度ごとにばらつきが若干あるものの、女性の5割から6割、男性の2割5分から3割、全体の3割から4割が大学入学時までに何らかの「ダイエット」を経験しているということになる（表1太字部分）。おそらくこれから以降、20代の半ばにかけて、実行率はさらにあがっていくと思われる。

では、彼女ら／彼らはどのような「ダイエット」を行なっているのだろうか。これについてはQ1のSQ1で自由回答形式で答えてもらっているが、データを集計する際には、(1)「食事制限」（食事の量や回数を減らす、間食を抜く、

表1 「ダイエット」経験の有無

	女 性			男 性			全 体		
	経験あり	なし	計	経験あり	なし	計	経験あり	なし	計
2000年度	39 (54.2)	33 (45.8)	72 (100.0)	14 (25.9)	40 (74.1)	54 (100.0)	53 (42.1)	73 (57.9)	126 (100.0)
2001年度	27 (51.9)	25 (48.1)	52 (100.0)	5 (10.2)	44 (89.8)	49 (100.0)	32 (31.7)	69 (68.3)	101 (100.0)
2002年度	45 (56.3)	35 (43.7)	80 (100.0)	23 (29.9)	54 (70.1)	77 (100.0)	68 (43.3)	89 (56.7)	157 (100.0)
2003年度	37 (61.7)	23 (38.3)	60 (100.0)	19 (25.7)	55 (74.3)	74 (100.0)	56 (41.8)	78 (58.2)	134 (100.0)
通算	148 (56.1)	116 (43.9)	264 (100.0)	61 (24.0)	193 (76.0)	254 (100.0)	209 (40.3)	309 (59.7)	518 (100.0)

など)、(2)「運動をする」(運動一般および特殊な体操など)、(3)「特定の食品や薬品を用いる」(ダイエット用の食品やサプリメントなどを用いる)、(4)「その他」の4つのカテゴリーに分けて整理した。各年度ごと・性別ごとにまとめたものを表2に示す。なお、複数の手段を用いているものもいるので、合計は「ダイエット」を実行した人数と必ずしも一致しない。表中の数値は実数で、カッコ内は「ダイエット」実行者中に占める割合(百分率、小数点第2位で四捨五入)である。

「食事制限」と「運動」が男女ともに主要な手段になっていることがわかる。この2つの手段は比較的各年度とも安定して用いられているが、「ダイエット食品等の使用」は年度ごとによりかなりのばらつきがある。1997年に別の講義(「社会論」)で同じアンケートを実施した際にはあがっていた「スパイラルテープを指に巻く」「食品用ラップをふとももに巻く」などの「器具の活用」が近年ではほとんど見られないことも、「食事制限」・「運動」以外の手段には流行廃りがあるらしいことを示しているようである。

「ダイエット」に関する情報を彼女ら／彼らはどういったところから入手し

身体をめぐる権力のジェンダー差 (高橋 準)

表2 「ダイエット」の種別

	女 性				男 性				全 体			
	食事	運動	食品	他	食事	運動	食品	他	食事	運動	食品	他
2000年度	27 (69.2)	21 (53.8)	5 (12.8)	3 (7.7)	8 (57.1)	9 (64.3)	0 (0.0)	3 (21.4)	35 (66.0)	30 (56.6)	5 (9.4)	6 (11.3)
2001年度	17 (63.0)	19 (70.4)	1 (3.7)	1 (3.7)	3 (60.0)	4 (80.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	20 (62.5)	23 (71.9)	1 (3.1)	1 (3.1)
2002年度	32 (71.1)	21 (46.7)	13 (28.9)	0 (0.0)	13 (56.5)	15 (65.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	45 (66.2)	36 (52.9)	13 (19.1)	0 (0.0)
2003年度	25 (67.6)	25 (67.6)	3 (8.1)	0 (0.0)	11 (57.9)	13 (68.4)	2 (10.5)	2 (10.5)	36 (64.3)	38 (67.9)	5 (8.9)	2 (3.6)
通算	101 (68.2)	86 (58.1)	22 (14.9)	4 (2.7)	35 (57.4)	41 (67.2)	2 (3.3)	5 (8.2)	136 (65.1)	127 (60.8)	24 (11.5)	9 (4.3)

表3 「ダイエット」情報入手元

	女 性				男 性				全 体			
	雑誌	テレビ	友人	他	雑誌	テレビ	友人	他	雑誌	テレビ	友人	他
2000年度	25 (64.1)	5 (12.8)	6 (15.4)	3 (7.7)	2 (14.3)	3 (21.4)	1 (7.1)	8 (57.2)	27 (50.9)	8 (15.1)	7 (13.2)	11 (20.8)
2001年度	22 (52.4)	7 (16.7)	7 (16.7)	6 (14.2)	2 (16.7)	2 (16.7)	2 (16.7)	6 (50.0)	24 (44.4)	9 (16.7)	9 (16.7)	12 (22.2)
2002年度	18 (40.9)	12 (27.3)	5 (11.3)	9 (20.5)	3 (13.0)	7 (30.4)	4 (17.4)	9 (39.2)	21 (31.3)	19 (28.4)	9 (13.4)	18 (26.9)
2003年度	15 (40.5)	11 (29.7)	9 (24.3)	2 (5.5)	2 (11.1)	7 (38.9)	3 (16.7)	6 (33.3)	17 (30.9)	18 (32.7)	12 (21.8)	8 (14.6)
通算	80 (49.4)	35 (21.6)	27 (16.7)	20 (12.3)	9 (13.4)	19 (28.4)	10 (14.9)	29 (43.3)	89 (38.9)	54 (23.6)	37 (16.1)	49 (21.4)

ているのかについては、Q1のSQ2で回答してもらっている。次に同じく各年度・性別ごとにその回答をまとめてみる。回答なしは除いている。(表3)

近年の傾向として、雑誌・書籍などの活字メディアからテレビ・ラジオ(おそらくテレビが主と思われる)の放送メディアへとウェイトの移行が見られる。「その他」では、特記がない回答も多いが、男性で「自分で考えた」「常識的に考えて」という回答が目立つ。

ここまでをまとめると、男性と比較して女性はより多く「ダイエット」を実践しているということがわかる。内容は「運動」と「食事制限」が中心で、主に雑誌やテレビなどのマス・メディアから情報を得ているということになる。

雑誌、特に女性ファッション誌には多くの「ダイエット」情報がある。1996年の5月売りの雑誌(夏に向け薄着や水着を意識して、「ダイエット」「エステティック」関連の記事・広告が多くなる時期である)で「ダイエット」関連の広告をカウントしたところ、『ViVi』『Ray』『JJ』というようなブランド系ファッション誌で40ページ以上のページ数となっている。

また、業界では「泣く子と『ガッテン』『あるある』には勝てぬ」というような言葉もあるようである。NHKの『ためしてガッテン』とフジテレビ系列の『発掘!あるある大事典』で、「ダイエット」を含め食品関連の特集番組が多く放送されているからである。これらの番組で取り上げられた食品が翌日スーパーマーケットで売り切れるということも多いと聞く。

男性はテレビからの情報入手は次第に増加してきているものの、雑誌から情報を得ている例は少ない。それと比較して「自分で考えた」というような回答が多く、またあまり知人・友人などからも情報を得ていないということは、まだまだ男性の側で「ダイエット」が一般化しておらず、孤立した形で実践が行なわれているということの意味するのかも知れない。

ではこういった「ダイエット」実践や外部情報は、どのような形で女性・男性に内面化されているだろうか。

2001年度より調査項目に入っているQ2の身長と理想体重のデータを見てみ

表4 身長と理想体重の相関関係

【2001年度】	【2002年度】	【2003年度】
・女性 $Y = 0.55X - 40.5$ $R = 0.688$	・女性 $Y = 0.56X - 41.8$ $R = 0.617$	・女性 $Y = 0.56X - 43.4$ $R = 0.669$
・男性 $Y = 0.44X - 12.9$ $R = 0.353$	・男性 $Y = 0.78X - 72.0$ $R = 0.544$	・男性 $Y = 0.86X - 84.3$ $R = 0.599$

よう。理想体重を目的変数、身長を説明変数として、重回帰分析を行なって一次式で近似してみる。年度ごと・性別ごとのその式と重相関係数Rを次に示す。

一見してわかるとおり、毎年度女性の近似式はほとんど同じである。また重相関係数（つまりは説明率）もかなり大きい。これからするに、女性には非常に厳格な「体重規範」が存在することがうかがわれる。なお即断はできないが、Y切片が年々下がってきていることは、よりスリムな身体が理想とされることが多くなっていると解釈することができるかもしれない。仮に身長を158cm（2003年度女性サンプルの平均身長）とすると2003年度の理想体重は45.6kgとなる。よく「適正体重」の算出方法として、「身長（cm）から105を引く」（53kg）とか、「身長（cm）マイナス100、かける0.9」（52.2kg）、「身長（m）の二乗×22」（54.92kg）<sup>5</sup>などというが、それよりもかなり低い数値である。

これに対して、近似式から得られる男性の理想体重は、全てのサンプルが分布している身長の範囲内で女性を上回る位置にある。男性の方が女性よりもより「体重規範」はゆるやかで、しかもよりスリムでないところに基準があると言える。

### 3 身体と権力

本稿の目的はここまでのデータを整理して示すことにあるが、補足として、どのように理論的な位置づけが可能かにかかわるメモを付け加えておく。

人の行動は完全に自由におこなえるものではなく、つねに／すでにさまざまな力の関係の中にある。ミシェル・フーコーはこうした力の関係を「権力」と呼ぶ。

「ダイエット」も決して個人の自由な振る舞いではありえず、さまざまな権力関係の中で行なわれるものであると言える。そこで想定される権力関係とは、たとえば、周囲の人間の振る舞いや、より抽象化された対象の行動と、当該個人の振る舞いとの間に働く力の関係である<sup>6</sup>。男性よりも女性の方がより「ダイエット」を実践している割合が高いという事実は、女性の身体をめぐる特定の権力関係が男性よりも強く働いているということを意味している。

さてここで、権力そのものは目に見えるものではない。なぜか？ 先程述べたように、権力とは関係である。関係は目に見えるものではないのだ。

目に見えるようにするにはどうするか。まず一つ、権力が成員、この場合は特に女性の、身体や精神に残した痕跡を見るという手段がある。フーコーの言う「自己との関係」への着目である。浅野千恵は、『女はなぜやせようとするのか——摂食障害とフェミニズム』<sup>7</sup>において、男性であるなら一般に「社会的成功」と見なされる有名大学への進学や一流企業・官公庁への就職などが女性にとっては同じような意味を持たず、むしろ「きれいになる」あるいは「きれいにもなる」というかたちでしか彼女たちは「成功」を実感し得ない、そのプロセスでの一つの表現形態が女性にしばしば見られる「拒食症」や「過食症」などの摂食障害であると述べている。すなわち、摂食障害とは女性の身体に働く権力が、彼女の身体と精神の上に残していった痕跡であるということだ。また本稿では、女性と男性の「体重規範」を明らかにすることを通じて、現代日



本における体重をめぐる「自己への配慮」の性質を明らかにしてきた。

もう一つは、権力が「知」の中にどのように堆積しているかを見ることである。この場合の「知」には二つの形態がある。一つは「ことば」であり、もう一つはものの「かたち」である<sup>8</sup>。「ダイエット」（痩身）に関する「知」は、まず、女性に向けられたさまざまな「言説」、たとえば雑誌記事、テレビ番組、広告のコピーなどの形を取ってあらわれる。現代ではこれらの言説は、頻繁に「近代科学」の体裁を取ってあらわれる。さらにはモデル、芸能人、アニメーションの登場人物などのシルエット、ファッションの形式（服のデザイン）などとして表現されることもある（形象）<sup>9</sup>。本稿で触れたのは、マス・メディアが言説を通じてさまざまな知識を伝達しているということであった。

このように、「権力」「知」「自己との関係」という3つの項は、相互に関連しながら現代社会における支配の形式を形成している。現代日本では、「やせてきれいになりなさい」というメッセージが女性に対して、言説と形象の二側面の「知」に支えられて届けられ、さまざまな実践を通じて彼女の内面を構成し、権力関係を強固なものとする。

これらはすぐれて文化的な現象であるが、決して中立的なものではない。「どっちでも好きな方をおとりなさい」というものではない。「こうせよ」という強い要請になっている（力が働いている）という意味で、また「ダイエット」に成功することで大きな報酬（心理的、社会的）が得られるという意味で、まさに政治的な主題であると言えるのである。

[註]

- 1 福島大学共通教育科目「社会論」、1997年5月7日実施のアンケート自由記述より。アンケート内容は後に示す「現代文化論」で2000年度に実施したものと同一である。これについては、高橋、『『社会論'97』講義ノート』、『行政社会論集』10-2、1997年、で取り上げている。
- 2 「社会論」、1997年5月14日の感想文より。
- 3 福島大学行政社会学部には主に昼間に授業を行なう昼間主コースと、主に夜

間に授業を夜間主コースがあり、夜間主コースには社会人学生が約半数所属している。夜間主コースでも「現代文化論」は隔年で開講されており、ここでとりあげるアンケートも実施しているが、受講者の年齢にばらつきが大きいので、本稿では比較的年齢に近い学生が受講している昼間主コース生のデータのみを参照することにした。

- 4 講義にこうした素材を用いることの意義については、前掲の、高橋、「『社会論'97』講義ノート」で触れている。
- 5 ちなみにこれは日本医師会が採用しているBMI (Body Mass Index) による適正体重である。BMIは「体重(kg)÷身長(m)の二乗」で算出するが、BMIが22であると疾病にかかりにくいことが統計的に明らかになっているという。ちなみに、身長158cm、体重45.6kgの2003年度女性サンプル平均ではBMIは18.27になり、完全にやせすぎ(BMI 18.5以下)の領域に入る。<http://www.med.or.jp/>を参照。
- 6 フーコーの権力理論については、高橋準、「後期フーコーにおける権力と『自己との関係』」、『行政社会論集』、8-1、1995年、を参照。
- 7 浅野千恵、『女はなぜやせようとするのか』、勁草書房、1996年。
- 8 ドルーズは、「言説」と「光」が、互いに還元不可能な知の二つの形式であると主張する。Deleuze, G., *Foucault*, Paris, Minuit, 1986, p. 58、宇野邦一訳、『フーコー』、河出書房新社、1987年、82頁。
- 9 香山リカは1990年に、「十年前に活躍していたアイドル歌手はみな、コロコロに太っているのに驚かされます。今日のほとんどの高校生よりスタイルが悪い。昔はそれを『カワイイ、あなりたい』と憧れて見ていたわけですから、標準的なボディ・イメージはこの十年で大幅に変わり、ワンレベル、サイズが小さくなったようです。」と書いている。香山リカ、『リカちゃんコンプレックス』、ハヤカワ文庫、1994年、45-46頁。